アウトドアレクリエーション・レジャーをめぐる問題点

大森　義彦

（教育学部保健体育教室）

Some Problems on Outdoor Recreation & Leisure Activities

Yoshihiko OMORI

Laboratory of Health & Physical Education, Faculty of Education

キーワード：自由時間，自然志向，ゴミとし尿

はじめに…レジャーブーム

かって，レジャーブームと言われた時期があった．全国津々浦々人々はレジャーを求めて駆け巡った．年末年始や，ゴールデンウィーク，夏の盆前後の人々の動きは「民族大移動」と称され，日本列島にも大型レジャーが到来したと言われた．東京オリンピックをいわば嚆矢として，「もはや戦後は終わった」として大阪・千里での万国博覧会など国際的な大規模イベントも次々と誘致され，国民は西へ東へと走った．しかし今日，レジャーブームや民族大移動という言葉を耳にすることはめったにない．だがそれは人々の動きが静まったことを意味するものではない．それは，日本人のレジャー活動が衰退したということではなく，むしろレジャー活動はより盛んになっていると言わなければならない．つまり，ブームというと一過性のものというイメージがあるが，日本におけるレジャー活動（以後単にレジャーというも同義とする）は今や一般庶民の生活の中に相当程度浸透しており，ことさらブームと呼ぶまでもない普遍的な状況になっていることを物語っている．

とはいえ，日本におけるレジャー活動がなんの問題もなく望ましい形で進展しているわけでもなければ，国民の間に完全に定着しているわけでもない．レジャーに関して様々な問題が生まれているのも事実である．そこで本論では，レジャー活動の中で大きな位置を占めるアウトドアレクリエーションを中心として，レジャー活動の実態や課題等について考えていきたい．

高いレジャー欲求

「ニュースポーツ百科」にはニュースポーツとして，以下の55種目が紹介されている．

パドルテニス，エスキーテニス，テニスバット，パンポン，バスケットピンポン，インディアカ，ビーチバレーボール，ソフトバレーボール，セパタクロ，リングテニス，ラケットボール，フットサル，ネットボール，ミニバスケットボール，タッチラグビー，スピードボール，ユニバーサルホッケー，ラクロス，チェックボール，ドッジボール，ローンボウルス，ペタンク，シャフルボード，ユニカール，グラウンド・ゴルフ，ターゲットバードゴルフ，ゲートボール，レクリエーションクロッケー．14インチ・スローピッチソフトボール，ティーボール，カンガクリケット，フライイングディスク，綱引競技，カバディ，一輪車，ウォークラリー，ダーツ，ウォールハンドボール，ワンバウンドバレーボー

ル，ミニソフトテニス，キックベースボール，レクトボール，スポーツチャンバラ，シャトルボール，スノーホッケー，チャレンジ・ザ・ゲーム，ラート，ブーメラン，ネイチャーエクスプロアリング，フットバッグ，流鏑馬バイシクル，ラングラウフ・スキー，スノーピラミッド，雪合戦，リズムなわとび[1]．

レジャー活動の対象としてはスポーツが大きな地位を占めているが，従来の競技スポーツの愛好者はどうしても若い人に限定されるのに対して，これらのニュースポーツは年配者にも受け入れられやすいものである．年配者のスポーツ欲求が高まって新しいスポーツが考え出され，新しいスポーツはまた新たな年配者を引きつける．スポーツだけでもこのような多様化が見られる．各分野で新しい活動の楽しみ方が考案され，レジャー活動の選択肢は非常に大きなものになってきた．

1996年7月に総理府が実施した「国民生活に関する世論調査」によれば，「今後，生活の，特にどのような面に力をいれたいと思いますか」という質問に対して「レジャー・余暇生活」をあげる者が第一位で36.6％を占めている[2]．この調査は1958年以降毎年行われており，1997年5月の調査では「レジャー・余暇生活」は36.2％を占めており，1983年に26.3％を獲得してそれまで一位であった住生活（25.2％）を抜いて以来，15年間ずっと一位を確保している．しかもここ10年近くは35％から37％に達し，二位を10％から15％も引き離すという高率で推移している[3]．家計消費の面でも，近年自由時間関連支出が消費支出全体に占める割合は24％前後で推移しており[4]，全支出の約四分の一がレジャー活動を中心としたものに向けられている．

それだけ人々の暮らしにおいて時間的にも金銭的にもゆとりができたことが伺える．さらに重要なこととして，平均寿命が伸び，老後をいかに有意義に生きるかということに人々が大きな関心を寄せ始めたことも見逃せない．かって「人生五十年」と言われたのが，今や「人生八十年」の時代を迎えている．平均的に言って仕事から退いて20年前後，長ければ40年間は再就職をしなければ大半が自由時間である．その20年ないし40年もの間に何をするのかと考える時，余暇活動に目を向けるのは当然のことわりである．こういう事情も人々が遊びを重視するようになった要因の一つと言えよう．

このような状況からは，日本人の余暇活動はすっかり国民生活に根づいているかのように思われるが，その実態は必ずしも好ましいものとは言えないのも事実である．日本人にとってレジャー活動は，長い年月をかけて徐々に生活に溶け込んでいったものではなく，戦後の日本経済の急成長に伴ってブームとして急激に訪れ，レジャーとはどんなものであるかを考えるゆとりもないまま一気に人々を巻き込んでいった．また，日本のレジャーは，「法人需要がレジャーサービスの急速な普及を先導したきた」[5]とも言われるように，古くは職場の慰安旅行，新しくは会社の接待として発展した側面が強かったという事情もあって，国民のレジャーに対する考え方や行動様式などの面で未熟さが見られ，様々な問題を生み出している．

これから述べるレジャーにおける様々な問題点は大きく分ければ，「人の問題」，「場所の問題」，「時間の問題」の三点になろう．いずれにしても，今日のレジャーが日本の日常的な社会的活動として定着しておらず，レジャーに対する個々人の考えもバラバラであること，加えて行政などによる教育や組織的な対応がなされずに観光産業主導のもと個人的嗜好あるいは企業のもうけ第一主義に基づいて，いわば無政府状態的に実行されていることに起因するところが大きいと言えるのではなかろうか．

レジャーに求めるもの

余暇開発センターの調査によれば，余暇に求める楽しみや目的は，「心の安らぎを得ること」が59.1％，「友人や知人との交流を楽しむこと」が57.8％であり[6]，ここ数年の傾向としては，「心の安らぎを得ること」，「身体を休めること」，「日常生活の解放感を味わうこと」などが増えている[7]．このことは積極的に余暇活動を楽し

むというよりは，「休養」重視型であり，あるいは「フラストレーション解消」型であると言えよう．なにか，日本人の日常の忙しさや満たされぬ心の内面を物語っているようでもある．

余暇時間が多いと言われる欧米先進国のレジャーも，一見のんびり休養型に見えるが，日本と欧米両者のレジャーには根本的に質的な違いがあると言わねばならない．同じ休養型といっても，欧米の場合は休暇が長いため，一箇所に長くとどまって，太陽を楽しんだりゆったりチェアに座って読書にふけるなど，ゆとりが感じられる滞在型レジャーである．これに対して日本の場合は，短い期間にできるだけ多くの場所を訪れたい，たくさんのことをやりたいという「通過型」レジャーが多い．とりわけ海外旅行にその傾向が顕著である．そのため日本人の海外旅行の特徴は「短期の周遊型が圧倒的に多く，観光，ショッピング，グルメ，スポーツ等活動的でお金をかけるタイプ」[8]ということになりやすい．

発展途上の日本の余暇

先の「レジャー・余暇生活」に力を入れたいという調査結果は，働くことを美徳としてきた日本人の価値観が遊び重視型に転換した証拠であるが，逆に言えば，いまだ満足し得るほどの「レジャー・余暇生活」に恵まれていないということになろう．つまり，日本人のレジャーは発展途上にあるのである．ともかく，多くの国民にとって，レジャーは日常的生活スタイルの一環としてのごく普通の行為というよりは，まだまだ特別な場合の特別な行為という意味あいが強いと言わなければならない．日常のしがらみから解放されたいとか，仕事のことは忘れたいとか，日頃のうっぷんばらしなどという風に，仕事は仕事，遊びは遊び，日常は日常，余暇は非日常，と両者を対極にあるものと見なす傾向が強い．先に上げた「人の問題」とは，主としてこういうところから生起しているものであって，後述する種々の問題行動が伴うことを意味する．

衣食住が十分であるだけでは，真に豊かで幸せな生活とは言えない．生き甲斐は幸せを構成する大きな要素であるが，生き甲斐の中には自己の好みに応じた余暇活動，つまり趣味などを持つことが含まれる．極論すれば趣味などの遊びの世界にある時，人は生きていることを実感し，生き甲斐を感ずる．趣味に没頭できるひとときのある平和な社会は，一つの豊かな社会と言えるであろう．それも，日常生活のしがらみを忘れての一時しのぎのうさばらしや「いのちの洗濯」ではなく，生活の一環としての趣味・レジャー活動であってこそ生き甲斐につながるものではなかろうか．仕事と趣味・レジャーの両者は相反するものでもなければ，レジャーは日常から隔離された虚構の世界の出来事なのでもなく，仕事もレジャーも何もかもひっくるめたものが現実の人間社会なのである．

余暇開発センターが1996年に行った調査では，スポーツを行う目的として「健康・体力の維持増進」や「気分転換，ストレス解消」が多いのは当然として，高年層では「生きがいを感じる」という項目が特に高い比率を示している．また，将来スポーツをしたいとする人の目的としては，「『自然とのふれあい，挑戦』『日常から離れる』『自分の生活の充実』『生きがいを感じる』『生涯の楽しみのひとつ』などの項目で現状より高い比率が示されており，より個人の生活や人生を充実させる目的でスポーツしたいという傾向が強まっているようだ」[9]と分析している．今や多くの人がスポーツやレジャーを生活を豊かにするものと考えるようになってきているが，今後ますますこのような傾向が強まっていくものと思われる．

忙しい日本人

日本の労働者１人平均年間総実労働時間は1900時間であり[10]，1980年代後半以降，とりわけ1988年の労働基準法改正に伴い相当のスピードで年々減少しているが，1995年12月の閣議決定「構造改革のための経済社会計画―活力ある経済・安心できるくらし―」に定められた年間総労働時間1800時間の達成・定着にはまだ及ば

ない[11]．

1995年で何らかの形態で週休二日制適用の労働者は96.2%，完全週休二日制は57.8%[12]，1996年では，前者が96.5%，後者が59.3%と年々着実に増加している[13]．そして，1997年4月からは週40時間労働制が適用されているが，一刻も早く政府目標が達成されることを期待したい．学校でも遠からず完全週休二日制が実施されることになっており，大人だけでなく子供にも自由時間が増えることが確実に予想される今，余暇活動の重要性はますます高まっている．

なんといっても，レジャー活動にとって一番大きな意味を持つのは自由に使える余暇時間なのであるから，労働時間の面でも欧米先進国の1600時間内外に追い着いてほしいものである．そうでなければ，日本人にとってレジャー活動は相変わらず「休養」，「疲労回復」，「気分転換」の域に留まり，「自己実現」を図る主体的活動へと質的転換を遂げるのは難しい．総理府編の観光白書でも「国民が生活の中で真の豊かさを実感できる社会を実現していく上で，労働時間短縮の流れを確実なものとし，更に自由時間の拡大や，その利用における選択肢の増加などを図っていくことは今後の我が国の重要な課題の一つ」[14]と述べられている．

近年，中高年の登山ブームと言われ，身の回りにも山歩きや自然散策を楽しむ人が少なくないが，そういう人の多くがヒマラヤやアルプスのトレッキングに行きたいとの願望を持っている．その人たちが口をそろえて言うのが「金はなんとかなるけど，時間がねぇ」である．退職して時間はできたが，今度は体力がなくてやはり行けないということにならないためにも，労働時間の短縮，自由時間の増大は重要問題である．

レジャー活動としてのアウトドア

中高年の登山ブームを引き合いに出すまでもなく，アウトドアレクリエーションを楽しむ人口は極めて多い．余暇開発センターの調査によれば，「余暇に求める楽しみや目的」として，先述のように「心の安らぎを得ること」が59.1%，「友人や知人との交流を楽しむこと」が57.8%で1位，2位を占めるが，5位に「健康や体力の向上をめざすこと」，7位に「自然に触れること」，8位に「知識や教養を高めること」[15]とある．この三つを「健康・自然・教養」というキーワードでまとめることにするが，それが自ずと向かうところがアウトドア活動であると言えよう．

年をとって健康や体力に自信をなくしつつある人々は，何かしら運動をしなければと思う．けれども競技スポーツはやったことがない，あるいは若い時にはやったが，今さらそんな激しいことはできないという人が多い．そういう人が目をつけるのが，他人との競争がない，特別な技術は不要で簡単にやれそう，マイペースでやれるという山歩きであってなんら不思議はない．今では，中高年にとって最も望ましい運動は歩行であると言われるようになり，歩行の延長として山歩きが注目されるようになったという理由もあろう．多くの場合，スポーツは激しい運動を伴う．疲れたからといって自分の都合で勝手に休憩することはできない．対戦相手がいるから手を抜くこともできない．勝負となれば必死にならざるを得ない．こうしてどうしても無理を重ねる．これに対して山登りの場合は，苦しい運動であるには違いないが，他人と競争する必要もなければルールで登り方や使用する道具が規制されているわけでもない．疲れないようなスピードで歩き，それでも疲れたならばいつでも休めばよいというまことにマイペースに撤した運動である．

しかも山歩きは，自然との触れ合いができ，さらにそのことによって野生動物や草花に関する知識，地質や気象に関する知識を身につけるなどの知的興味に訴える側面を持つ．まさに「健康・自然・教養」欲求を同時に満たしてくれる一石三鳥の行為である．余暇開発センターの調査によれば，スポーツを行う目的として，「『自然とのふれあい，挑戦』の項目では，中高年層で高い比率を示して」[16]いるという結果が出ているのも当然と言えよう．

もう一つ付け加えるならば，レジャー活動として参加希望率の最も高いのは国内観光旅行（75.7％）であり，潜在需要率では海外旅行（35.1％）[17]である．つまり旅行に対する欲求が強いのであるが，山歩きを始めアウトドアレクリエーションには日常生活圏から離れるとか，未知の地を訪れるとかの旅行的要素も強く，いくつもの欲求に同時に合致するものである点も見逃せない．

よく言われる生活環境の都市化や労働条件の質的変化という要因も人々を海・川や森林・野山へ引きつける．かって，屋根にカヌーを取りつけた車を見かけるのはごくまれであったが，ここ数年すっかり見慣れた光景となってしまった．今やカヌーはアウトドア活動の象徴的地位にまで登り詰めたと言って過言でないほどにポピュラーなものとなった．

道路事情の発達と車社会の進展はオートキャンプという新しい形のキャンプを促進させた．都市近郊の川原でも，いろいろな形，色彩のテントが見られる．もっとも大概，ほとんど夏のみに限られるが．用具使用に関してルールなどによる規制のないアウトドア活動ではいろいろな道具が考案されているが，釣具店はもとよりホームセンターまでもが，アウトドア用品全般を取り扱うようになり，今では専門店よりもホームセンターの方が販売量が多いのではないかと思われるほどになっている．一昔かせいぜい二昔前までは，一部の専門的趣味を持つ人が使うものと見なされていた道具，あるいは新しく考案された便利で魅力的な道具が誰の手にも届くようになったことも大きく影響して，いよいよアウトドア活動が浸透しつつある．

1996年８月に総理府が行った「自然の保護と利用に関する世論調査」によると，自然についてどの程度関心があるかという問いに対して，「非常に関心がある」が27.9％，「どちらかと言えば関心がある」が55.5％，合計で83.4％という高率を示している．そして自然に関心を持つようになったきっかけとして上げている項目では，「美しい風景のあるところを旅行してから」（46.0％），「開発によって自然が失われていく様子を見聞きしてから」（45.2％），「子供のころから動植物が好きだから」（23.2％），「登山やハイキング，キャンプなどをしてから」（21.1％）などが高い比率を得ている[18]．

また，レクリエーションなどで自然の多いところに出かけた目的として，「美しい自然の風景を楽しむため」（32.0％），「登山，ハイキング，海水浴，森林浴，キャンプなどを楽しむため」（30.3％），「自然の中で休息するため」（21.2％）などの項目を選択している[19]．このようなことから，多くの人が自然とはまず風景が美しいものであるととらえており，その美しい風景に接したいと考えていることがわかる．

参加人口増大がもたらす諸問題

アウトドア活動人口の増大自体は大いに好ましい現象であるが，参加者数が増えるにつれて否定的側面も見られる．例えば道具の普及の点で言えば，長らく専門的に実践してきた人が持たない数多くの便利な道具を，初心者が取り揃えているのを見て違和感を感じるという面もある．少ない道具でもって工夫を凝らしていたものを，今は道具に頼って済ませてしまうのである．道具の発達・普及は特別な訓練・技術を持たない人の参加を容易にするという効用を持つ反面，日常生活スタイルとは一線を画していた単純素朴なアウトドア活動を，文明の利器に頼る日常生活と大差ない複雑なものに変化させた．

一番大きな問題は従来細々と受け継がれてきた技術・流儀・マナーなどが，一気に流入してきたいうなれば不特定多数の人々には伝達継承されることがなく，しばしば非難される種々のモラル上の問題を生み出す原因となっている点である．

我が国にはアウトドア活動を含めてレジャー・レクリエーションに関するきちんとした教育体制がない中，特別難しい技術や知識を要求されないアウトドア活動は誰でも簡単に始めることができる．小グループ同士，見よう見まねで実施しているのが実情であると言えよう．体系的知識や技術を知らないまま実施しており，個々

の価値観やマナーも多様で，マナーの悪さが指摘されることも多い．

高知市近郊の河川敷にある某キャンプ場は夏の間大いに賑わう．家族連れや小グループが午後やって来てテントを張り，夜は炭火を囲んでバーベキューとビール，翌日は水遊びをして午後引き上げるというのが一般的パターンで，長期滞在する人はいない．長期滞在しようにも，近辺に遊ぶ対象は少なく川遊び以外することがないし，日中のテント内は暑くて昼寝もできない．屋根付き炊事棟はなく，雨が降ったら薪での炊飯はお手上げで，何日も滞在すれば雨に降られることもあろうから，そもそも最初から長期滞在向きのキャンプ場ではない．高知県のキャンプ場はたいてい大同小異であまり条件はよくないのだが，それはともかく以前8月半ばすぎに訪れた時，こういう問題があった．キャンプ場一帯に異臭が立ち込めていたのである．それは鼻をつく臭いで，長らくその場にいるのが我慢できないような悪臭であった．詳しく調べたわけではないが，その悪臭の原因は次のようなものではないかと推察した．

夜，ほとんどの大人は飲酒する．解放感に浸ってつい飲み過ぎがちになるのが普通である．その結果，嘔吐する人がかなり出る．それは人々の輪から少しだけ離れた場所でもどすことになる．そしてまた，ビールを飲んで所構わず放尿する．トイレが少ないという問題も多少かかわってはいるが，飲酒者はトイレがあろうがなかろうがどこでも排泄するのが常である．この吐瀉物と小便とが悪臭の二大元凶で，さらには，バーベキューの後を充分片付けないまま，あるいは残飯をそのまま捨てていく人もいて，それらが合わさってなんとも言えない異臭を生み出すのではなかろうか．

もう一つ身近な例として四万十川流域キャンプ場で問題となった地元の困惑を新聞記事から紹介しよう．

「村役場職員や地区長らに聞くと，もちろん一部の観光客ではあるが，ひどい例も多い．『夜中に酒を飲んで大騒ぎするわ，打ち上げ花火を上げて爆竹を鳴らすわ』『ゴミは分別せず，一つの袋に一緒くた』」という問題や，「地元を特に怒らせたのがトイレ問題だ．（中略）夜になると，竹やぶ，個人の畑で用を足す人が相次いだ」など，主として騒音・ゴミ・し尿問題の他，「四輪駆動車の河原への乗り入れも深刻」[20]といった問題が指摘されている．一方では，地元民の間でも，「顔なじみの常連客がマナーの悪い客を注意してくれたりと，ずいぶん改善された」という声がある他，利用上のルールや規制を定めても「県がきちんとしたキャンプ場を数カ所整備した上でないと規制が守られるはずがない」[21]と本質を見据えた指摘をする人もある．

上述の例は一言で言えばマナーの問題であるが，そのマナーの悪さはどこから来るのであろうか．先述した従来細々と受け継がれてきた技術・流儀・マナーなどが受け継がれていないということの他にも理由はないか考えてみよう．いかにレジャーが普及したとはいえ，多くの人にとって未だ日常的活動とはなっていない．旅行やアウトドア活動は年に一度か二度の「特別な場合」で，それだけに「一点豪華主義」的に派手にやろうということになりやすい．ゆえにレジャーに関しては，衣食住など日常的な事柄に対するのとは異質な金銭感覚が伴うことになる．これが何度も行うことであれば，一回一回できるだけ金をかけずに簡素にやるよう工夫するのだが，滅多にない機会とあれば，そのようなことはあまり考えない．その結果無礼講的になりやすい傾向を持つことになる．夏のキャンプ場は飲めや歌えやの大騒ぎで，さながら小宴会の大集合である．高歌放吟，挙げ句は深夜に及ぶカラオケ大会や花火大会となることもある．

さらにまた，同一の場所へ何度も訪れるのであれば言動にも気をつけ，できるだけ丁寧に使ってきれいにしようという気持ちが生まれようが，次は翌年まで来ないかあるいはもう二度と来ない場所となれば，なかなか「立つ鳥跡を濁さず」というわけにはいかないのかもしれない．

特定時期の混雑と割高なレジャー経費

年間を通じて何度もキャンプを行うのが普通になれば「無礼講」は減少するであろうが，まだまだキャンプは夏だけのものという固定観念が強く，秋や冬にキャンプをすると何か珍しいことをしているような目で見られるのが現実である．このようにキャンプは圧倒的に夏のみの活動であるが，キャンプに限らず特定時期に特定場所が混雑するというのが，日本のレジャーの実態である．例えば，国民のレクリエーション旅行回数を月別に見ると8月と5月が高く，特に夏休みのある8月は年間旅行回数の16.9％を占めている[22]．人出そのものは8月が一番多いが，混雑度の点では5月の方がより高い．言うまでもなくゴールデンウイークに集中するからである．欧米先進国のごとくバカンスが一ケ月以上もあれば人出は分散されるのだが，日本では特定時期つまり短い夏休みやゴールデンウィークという数日間に，いわゆる有名地に人々が殺到することになる．

なお，レジャーにおいては金銭感覚が変わってしまうという点で，日本人が最も憧れるレジャーである海外旅行においては，「日本人の高級好み」[23]という指摘があるのもその好例と言えよう．なにしろ一回あたりの平均日数は「ここ数年8日程度で推移」[24]と短く，しかも一生に一度かあるいはよくて数年に一度の海外旅行となれば，金に糸目はつけないという気持ちにもなろうというものである．海外旅行に限らず，国内旅行においても「割高な価格水準」[25]にあるなど，生活全体から比べると日本人のレジャー費用は諸外国より高めになっている．レジャー施設や観光地へ行けば，自動販売機の清涼飲料水の値段が高く設定されているのが普通で，それに対してさしたる非難もなく，多くの人が「観光地だからこんなもの」と考えている．受け入れ側にしても，特定時期には黙っていても人がやって来ていろいろなものを買いあさり，様々な施設を利用するのであるから，強気の商売ができる．逆にシーズン以外や平日はあまり人が来ないのだから，稼げる時にできるだけ稼ごうということになって必然的に高めの価格設定となるのである．客の側はそういう事情を知ってか知らずか，ともかく遊びは多少高くついても仕方がないという感覚が支配しているように思われる．

もう一つ，割高な価格水準となっている理由として，日本独特の習慣としてレジャーが「接待（ゴルフ，旅行，演劇等），役員や従業員の福利厚生，冠コンサートなどの広告宣伝という形で」職場と強く結びついており，「サービス料金が交際費から支出される場合，個人の生活実感からかけ離れた水準のサービスが消費される」[26]など，消費者本人が直接コストを負担しないために料金が高くなるという指摘もある．

特定時期に特定場所が混雑する問題の解決策の一つとして，休暇の分散化を進めることも効果的であろう．例えば，ドイツでは「各州ごとに企業及び学校の夏期休暇をずらして」いるというし，フランスでは，「学校の冬季及び春季休暇について国全体を3つのゾーンに分けて」おり，アメリカでは「学校ごとに休暇を2週間程度ずらして」[27]いるそうである．

アウトドアと自然

アウトドア活動ではアウトドアライフを楽しみ，自然体験をすることができると言われる．そして文部省などが生涯学習，体験学習を唱道するようになったことも，人々のアウトドア活動に対する関心の高まりに相当程度影響したと言ってよかろう．それはともかく，ここで言うアウトドアとは戸外全般という意味ではなく，自然と同義として使われている．そして人は簡単に自然と言うが，では自然とは一体何かと問われるとはっきり答えられる人はまずいない．観念的には何も疑念のない言葉であるが，その意味するところははなはだ多岐に渡り，自然の定義を一言で言い表すのはとうてい不可能である．であるからここでも自然は生きた存在であるということだけを強調しておこう．すなわち美しい水，美しい空気に包まれ，人工騒音や悪

臭がないといういうのは自然本来の姿であると言えようが，それだけでなく，つまりいわば無機的な世界なのではなく，いろんな野生動物が住み，森では樹木が生き生き育って小鳥がさえずり，草原には色とりどりの花が咲いている，そういうものが実際の自然なのである．要するに，動植物を中心とした各種生命体がそれぞれの領分を守りながら，バランスよく存在して全体として大きな連鎖をなしているのである．そのような多種多様な無数の生命が溢れているのが自然というものであり，まさしく生きているからこそ自然であると言わねばならない．そして以前身近に見られた小鳥や昆虫があまり姿を現さなくなった時，人は自分たちの生活環境が悪化したと言い，奥山の野生動物や植物が極度に減少した時，人は自然破壊が進んだと言う．人間が地球に現れるまで，地球はまるごと自然であった．だが人間は自然に働きかけ，自然を作り変えて今日の地球の姿に至った．それゆえ環境問題のほとんどすべては人間が存在すること自体に起因する．では，人間はなんのために自然を作り変えてきたのかについてはひとまずおくとして，そういう意味で人間が出現するまでの地球こそは最も豊かな自然そのものであった．地表は緑におおわれ，小鳥が飛び交いさえずり，獣が時折姿を見せ，足元には美しい草花が咲き誇り，人工的騒音や異臭はなく空気はさわやかで，小川を流れる水は澄みきっている．そのような場面に出くわした時，人は豊かな自然を実感する．砂漠のただ中で自然が豊かであると感ずる人はまずいないであろう．そこは荒れ果てた自然である．豊かな生命があってこそ，人は自然を感ずるのであろう．

人はそのような自然の迫力や美しさに感動し，時として訪れる天変地異の猛威に恐れおののく．自然から受ける感動や畏怖の念が人間精神を培い，人は自然に対して抱く強い諸感情・感覚をなんらかの形で表現しようとした．それが歌，踊り，詩，絵図等として反映された．自然は人間に無限の創作活動の可能性をもたらし，こうして多くの芸術を生み出す元となった．このような豊かな自然に人は引きつけられる．とりわけ生活環境が都市化した現代人にあって，自然と触れ合いたいという願望は強い．それは人間が自然を相手にしつつ人間に発達したという点で，人間の潜在的欲求，本能とでも呼ぶべきものかもしれない．まさしく，人類史の追体験[28]である．

登山を目的に山の中に分け入った時，人は自己の運動欲求を充足させるばかりでなく美しい景色を眺め，草花に目を奪われ，森の神秘さを味わい，小鳥のさえずりに耳を傾ける．大空と新鮮な空気，谷川の澄みきった水，風のそよぎや渓流のざわめきなどは人の心の奥深く訴える力を持つ．そのことによって人は感動とロマンを感じる．また険しい山岳自然が待ち受ける幾多の危険を克服して山頂に立つ行為や，未知の自然の奥深く踏み込む行為は人々に冒険心と勇気をもたらし，緊張や興奮がさらなる楽しみと意欲を生み出す．そして人々はそのような行為に大きな魅力を感ずるのである．

多くの人が，緑に包まれた風景に心の安らぎを覚える．時として，「緑」は「自然」の代名詞として用いられているが，その緑とは言うまでもなく，樹木や草である．特に森林は豊かな自然を感じさせる．古来，人間は森林から様々な恵みを受けてきた．中でも日本は世界有数の木の文化を有した国として，森林ならびにそれを構成する樹木と密接なつながりを結んできた．住宅材として木材は不可欠なものであるが，そればかりでなく文化を示すバロメーターとも称される紙も，原料は木である．また，人間は火を使うようになって飛躍的に発達を遂げたと言われるが，人類が初めて起こした火は恐らく木を燃やしたものであろう．木がなければ人類は火を自由に手にすることはできなかったに違いない．まさしく木は人間生活の重要な原点の一つであったのだ．このように太古より人間と深いかかわりを有してきた木であるからこそ，すなわち緑は人間の心を引きつける不思議な力を有するのではないかと考える．

本物の自然には近づけない

だが人々の願望に反して，自然は容易に人を近づけさせない．登山は数あるアウトドア活動の中でも最も自然と間近に対峙する行為と考えられているが，一般的な登山形態は登山道を歩くことであって，道がなければたとえ裏山であっても頂上にたどり着くのは極めて困難である．砂漠の真っただ中へ車で乗りつけるのは不可能で，何日もかけて厳しい気象条件の中を歩いて行かねばならない．草木が生い茂った中ではテントを張ることもできない．つまるところ，本物の自然には人間は近づけないのである．必ず，人が近づき利用できるよう何らかの人工的措置を講じなければならない．小は一本道の登山道から，大は草木を一掃した広いキャンプ場や屋根のある宿泊施設，休憩所やトイレを設置しなければならない．それのみならず，活動エリアへのアクセス道路や駐車場も敷設する必要がある．こうして一種の観光開発がなされることになる．その結果，自然が大規模に改変されることとなり，どこまでが必要不可欠な開発なのか，どこからが自然破壊なのかという難しい問題が発生する．

自然と触れ合おうと欲する人が多ければ多いほど，自然は人工の手を加えられ変化させられる．こうして人は自然に近づこうとすればするほど自然から遠ざかるというパラドクスを生じることとなる．だからこそ，自然との接し方が問題となってくる．現代のように，車に依存するレジャーが主力であれば，訪れるべき範囲はますます限定されてしまう．再度，拙稿「アウトドアと歩行」で述べた「人間が本当に自然と接するためにはできるだけ人工の力に頼ることを避けなければならないことが理解されよう．それは第一に歩くことが基本となるべきではないかということである．歩くためには細い一本道があればことたりるし，やたらと文明の利器を持ち込むことも制限される．なにしろすべてを自分の腕か背中で運ばねばならないのであるから」[29] ということを強調したい．

アウトドアの今日的環境問題―ゴミとし尿

アウトドア活動において上述のパラドクスは不可避の問題である．人が来れば必ずそれに見合う受け皿を作らねばならないわけで，様々な施設・設備整備がなされた．当然大規模な土木工事は自然破壊として問題視された．しかしその他にも当初は大して重要問題と考えられていなかった事柄だったのが，今日では関係者の一大関心事となっているというものがある．それは山のゴミとトイレ問題である．ゴミ問題はそもそもは美観上の不快感として始まったと言えよう．排泄物にしても，美観や不潔さという点で問題とされるのがほとんどであった．ところが登山者数が桁違いに増えた現在，それらは単なる美観や衛生といった主として人間の感覚・感性に起因するような問題だけでは済まなくなってしまった．

山からゴミを持ち帰ろうという運動が始まって二十数年になる．高知県では1970年ころから山に放置されたゴミを持ち帰る「清掃登山」が始まった．1975年には「三嶺を守る会」が結成され，三嶺で清掃登山を実施し今日に至っている．同じころ日本勤労者山岳連盟が全国的な規模で清掃登山に組織的に取り組むようになった．今日，日本勤労者山岳連盟の主導のもと6月の環境月間を中心に，全国で一斉に清掃登山が行われている．当初，ゴミ持ち帰りは大多数の登山者の支持を得られる主張ではなかった．とりわけ冬山登山などでは，ゴミは一斗缶に詰めて谷底へ蹴落とすのが「正しいゴミの処理法」的な風潮が支配的な時代であった．このようにゴミはそのまま捨てるのが普通で，よくて燃やすか土中に埋めるのがせいぜいであった．

折しも，山小屋でも不燃物や生ごみは土中に埋めていたが，元来山岳地帯は地表は土であってもすぐ下は岩盤という所が多く，次第に掘ることができる場所がなくなってきて悩みの種となってきた頃であった．そういう中で登山者の間にもゴミに対する関心が高まり始め，遂に今や，ゴミの持ち帰りはすっかり登山者の常識と

して定着したと言ってよい状況になった．これはかっての常識が非常識となり，非常識が常識となった好例である．ここ数年来は排泄物の持ち帰りまでが提唱されている．登山用携帯トイレや排泄物の圧縮凝固剤なども考案されている．こちらの運動はまだ常識化していると言うには程遠いが，たかだか20年内外でゴミ持ち帰りが常識化したのを考えれば，遠からず排泄物持ち帰りが一般的マナーとなる日が来るかもしれない．

上高地といえば日本を代表する山岳観光地として有名であるが，そのシンボルとも称される河童橋が架かる梓川には澄みきった水が流れている．だが一見素晴らしい清流であるこの水は大腸菌に汚染されて飲用不適とされている．その汚染源と見なされているのは，上流にある山小屋やキャンプ場のトイレである．とりわけ穂高連峰の峰々に囲まれた旧氷河地形である涸沢カールに設けられたトイレは利用者が多いだけに，その最大の汚染源ではないかと言われたこともある．もちろん，確たる証拠があるわけではなく，梓川の水質調査を行っている松本保健所の関係者は「その原因が人間のし尿なのか，動植物の死骸やし尿によるものなのかは特定できない」[30] と話す．

登山者が増えて，穂高連峰だけでなく全国各地の山小屋や登山基地のキャンプ場ではトイレによる水質汚染が大きな問題になっている．ゴミ問題はゴミ持ち帰り運動により，そしてまた山小屋でもヘリコプターによってゴミを運び下ろすなどしており，かなりの程度改善されているが，それと比べるとトイレ問題は改善に向けて着手されたばかりの状況にある．登山者のモラルに起因する面もなくはないが，人間の生理的現象であるだけにモラル・マナーだけで解決できる事柄ではなく，必ずトイレを設置しなければならないのであるから，より困難な問題である．

1998年6月には，初めて「全国山岳トイレシンポジウム」なるものが開催され，「全国から山小屋関係者や自治体，ジャーナリストなど約五〇〇人が参加した」[31] ことや，北アルプスや八ヶ岳でトイレに最新式の環境保全型システムを採用する山小屋が増大し，八ヶ岳のケースでは地元茅野市が「全国の自治体で初めて山小屋のトイレ改修に補助金を出すことになった」[32] 例などが物語るように，もはや垂れ流しでは済まない深刻な問題と化しているのがよく分かる．

先述した総理府の「自然の保護と利用に関する世論調査」で，自然の多いところに出かけて抱いた不満として選択した項目を多い順に並べると，「ゴミが散乱して，風景が損なわれていた」(53.4%)，「公衆トイレなどが十分に整備されていなかった」(32.5%)，「公衆トイレや休憩施設，水飲み場などが汚れていた」(30.8%)，「開発が進み自然がそこなわれていた」(16.6%)，「人が多く騒がしかった」(15.7%)[33] となる．やはり，ゴミとトイレ，自然破壊，人出の多さに関する問題点が浮き彫りになっている．

これまでは，自然保護というと大規模開発に伴う自然破壊が大きく取り上げられてきた．それはもちろん重大問題であるが，これからはゴミやトイレ問題といった極めて身近でだれもが避けて通ることのできない事柄が，実践する者の意識やマナーに直接かかわる環境問題としてますます重要な地位を占めるであろう．

おわりに

アウトドアレクリエーションとレジャーをめぐって，様々な状況の変化の中で余暇の過ごし方への関心が高まったこと，その結果としてレジャー・レクリエーションに対する意識にも変化が見られるものの，日本のレジャーは未だ国民生活に定着したものとはなっておらず，依然として特別な場合，特別な行為というとらえ方が強いこと，レジャー活動経費が割高であること，特定時期に特定場所が混雑すること，大規模な自然破壊だけでなく，ゴミ・トイレ問題に代表される行為者自身の行動様式や意識に直接かかわる問題が切実になってきていることなどについて述べてきた．

これからは，レジャー・レクリエーション活

動が日常生活の中に組み込まれたごく普通の行為となること，自由な発想で低費用のレジャーが楽しめるような環境が整うこと，自然との接し方に関して本質的な問いかけがなされること，レジャー・レクリエーションに関して，国民への啓発・教育を行う公的な働きかけがなされることなどを期待したい．

文　献

1）清水良隆・紺野晃編　ニュースポーツ百科〔新訂版〕大修館書店 1997 東京　pp.4-5
2）内閣総理大臣官房広報室　国民生活に関する世論調査 内閣総理大臣官房広報室編 平成9年版世論調査年鑑 大蔵省印刷局 1998 東京 pp.87-88
3）総理府編 平成10年版観光白書 大蔵省印刷局 1998 東京 p.24
4）平成10年版観光白書 p.15
5）経済企画庁物価局編「遊び」の値段 大蔵省印刷局 1992 東京 p.66
6）余暇開発センター編 レジャー白書'98 余暇開発センター 1998 東京 p.21
7）レジャー白書'98　p.2
8）「遊び」の値段 p.1
9）江田昌佑監修 スポーツライフ白書 ぎょうせい 1998 東京 p.72
10）平成10年版観光白書 p.18
11）平成10年版観光白書 p.20
12）平成9年版観光白書 p.18
13）平成10年版観光白書 p.18
14）平成10年版観光白書 p.17
15）レジャー白書'98 p.21
16）スポーツライフ白書 p.72
17）レジャー白書'98 pp.24-26
18）平成9年版世論調査年鑑 p.106
19）平成9年版世論調査年鑑 p.107
20）妙案ない"キャンプ公害" 高知新聞 1998年4月9日付
21）同上
22）平成9年版観光白書 p.27
23）「遊び」の値段 p.4
24）平成10年版観光白書 p.39
25）平成9年版観光白書 p.65
26）「遊び」の値段 p.65
27）「遊び」の値段 p.23
28）拙稿 野外運動の運動技術論的考察 野外運動研究第2巻第1号 1976　p.48
29）拙稿 アウトドアレクリエーションと歩行 高知大学学術研究報告第45巻社会科学分冊 1996　p.8
30）石川徹也 山のトイレ現在考 岳人605号 1997　p.87
31）石川徹也 山のトイレ問題はだれが責任を負うべきか? 岳人614号 1998　p.96
32）金子博文 山小屋のトイレやゴミ処理に環境保全型システムの採用や補助金の動き 山と渓谷758号 1998　p.83
33）平成9年版世論調査年鑑 p.107

平成10(1998)年9月28日受理
平成10(1998)年12月25日発行